

# モンゴル国立医科大学との交流 —その新たなステップ—

医学部長補佐(組織運営担当)

統合生理学分野 教授 勢井 宏 義

オリンピックの興奮が残る8月24日、医学科学生5名を含む徳島大学医学部モンゴル訪問団はウランバートル郊外のチンギスハン空港に降り立った。夏時間で日本と時差のないモンゴルは、日の暮れるのが遅く、訪問団は突き刺すような西日とひんやりと乾燥した大草原の空気に包まれた。筆者は2010年に次いで2度目の訪問となる。前回は、空港から市街地までの舗装されていないでこぼこの道路や、土煙をもうもうと立てながら我々を乗せて走るバスに、ある意味感動したが、今回、空港や道路はきれいに整備され、モンゴルは大きく変貌を遂げていた。

モンゴル国立医科大学(旧モンゴル健康科学大学)と徳島大学医学部との学部間交流協定は2005年に締結され、2006年から学生交流(相互訪問・サマーセミナー・ホームステイなど)が開始された。以降10年あまり、活発な交流が継続されている。多くのモンゴルからの留学生が徳島大学で学位を取得し、2012年には、モンゴルで同窓会も結成された。今回の滞在でも同窓会のメンバーには、送迎から観光まで大変お世話になった。モンゴル国立医科大学は国内唯一の国立の医師養成機関であり、国内のほぼ9割の医師がこの大学の卒業生である。今回、訪問団のうち教職員にとっての目的は、モンゴル国立医科大学に附属教育病院を建設するという大きなプロジェクトに向けてのミーティングがメインであった。苛原医学部長、永廣病院長、島田医学部長・病院長補佐、西野名誉教授、秋山蔵本事務部長(医歯薬学)、大城病院事務部長、鈴木病院看護部副部長、村澤医学部国際コーディネーター、そして筆者が参加した。

モンゴルには大学に附属した“教育病院”の仕組み・規則が無い。そこで、国際標準の医療を目指すモンゴルに、JICAが無償で150床程度の教育病院を建設することになり、すでに工事は始まっている(写真1:日本とモンゴルの国旗を掲げた工事現場)。徳島大学は「日本の医療」の実践を目指すモンゴル国立医科大学をサポートしていきたいと考えている。そのため、病院の管理運営にも日本式を取り入れたいとするモンゴル側の意向から、今回、初めて事務職員も参加することになった。モンゴル側からは、新学期のオリエンテーションで忙しい中、学長をはじめ研究部長、医学部長、病院長など一同が出席し、このプロジェクトへの強い意気込みが感じられた。現在、医科大

学が経営するのは25床足らずの小さな病院であり、その設備の乏しさに加え、医療保険制度や雇用・勤務体制も全く異なる中、「日本式医療」の実践には数々の壁が予想された。しかし、とてもやりがいのある仕事であり、徳島大学の一教員として誇りを感じる。このプロジェクトが成功することを強く願っている。

一方、学生はこれまで通り、モンゴル医学生の家ホームステイし、プレゼンテーションやパフォーマンスなど交流を行った。参加者(ホスト学生)は、医学科3年生の岩井君(Bilguun君)と木村さん(Nyamsaikhanさん)、2年生の玉山さん(Namuunさん)、小林さん(Gereleeさん)、高橋さん(Egelmaralさん)であった。2日目、教職員は会議のため同席できなかったが、徳島や徳島大学の紹介などを英語で行った後、パフォーマンスとして阿波踊りを披露したようである。モンゴルの学長が「ホストにはトップ5の学生を選んでいきます」と明言するように、ホスト学生は英語だけで授業を受けるコースの学生であった。最終日の観光に同行してもらった際、こちらからの質問にもてきぱきと返答し、素直でまじめな学生であった。日本や日本語にも興味があり、明治維新の日本人がそうであったように、海外の先進的な環境を目指す意識が高い学生だと感じた。振り返って、徳島大学の学生はどうか・・・、“次はどこへ連れて行ってくれるんですか?” “NOプランですか?” “馬に乗りたあい”などと言っているうちに、モンゴルに追いつき追い越される時が来るかも、と、少し心配な気持ちになったが、モンゴル学生からの評価は高かった。(写真2:前列中央にモンゴル国立医科大学学長を中心に参加者全員が会議室に集まる)

学生、教員、職員、大学、政府・・・、様々なレベルでの交流によって、様々なレベルにおいて、お互いの違いを感じ、きちんと認識し、そして、違いを超えて理解し合い、共に前進する。筆者は、大きな国際貢献のチャンスに立ち会える喜びを感じつつ、複雑で多様な、そして時として理不尽な問題を抱える現代世界において、若い医学生たちに明るい未来を期待したい。モンゴルの突き抜ける青い空の下、大草原に立ちゆったりとした本来の時間の流れを感じれば、人間という存在は自分が思っているほど悲観的なものではないのかもしれない、という想いに包まれるのである。



写真1



写真2

医学科3年 岩井 恵 太

この度、8月24日から4泊5日でモンゴル・サマーセミナーに参加させていただきました。行きの飛行機は到着が20時頃でしたが、モンゴルはまだ明るく夕日に照らされるステップ高原がとても印象的でした。広々とした地形を反映したかのように、モンゴル国立医科大学の学生はとても親切にしてくださり、モンゴルの生活を堪能できました。このセミナーを通してできたモンゴルの学生との繋がりをこれからも大切に、お互い医師として再会できることを楽しみにしています。



医学科3年 木村 蘭 子

「アムレノー」。伝統衣装を身につけ、二人で向き合い、目の人の腕が上になるようにお互いの腕を前に差し出して重ねる。そして「アムレノー」と言いながら頬と頬でKissする。これはモンゴルのNew Year Festival で使われる伝統的な挨拶です。サハナの家に着いて最初にこの挨拶を教えてもらいました。5日間という短い期間で医療人としての互いの将来について語り合い、友となり、再会を約束しました。モンゴルで得たものはたった数行では書き表せないものばかりです。このような素晴らしいセミナーに参加できたことを誇りに思います。



医学科2年 玉 山 美 都

私は将来国際的に活躍したく、海外で同じ医師を志す人達から刺激を受けたいと思い今回のサマーセミナーに参加しました。モンゴルでの滞在は、医学科5年生のナミという生徒の家でのホームステイでした。日本とは違った文化や大自然に驚き、感動させられる5日間でした。モンゴルの学生は英語が堪能で、自信があり、私の医学や英語などに対する姿勢を考えさせられました。将来、今回友達になったモンゴルの学生に負けないような医師になりたいと思います。



医学科2年 高 橋 里 鶴

モンゴルと聞いて思い浮かぶのは、大草原とゲル、そして馬、羊というような風景ではないでしょうか。郊外はその通りですが、首都ウランバートルは一転、大都会でした。写真はウランバートルの中央広場からの景色です。ここ10年ほどで急速に発展したそうですが、他国に頼る食料・医療状況やマンホール・チルドレン問題など、街の発展に追いつけていない部分もあり、少しでも解決に近づくように願っています。



医学科2年 小 林 陽 花

私は、モンゴルの病院を見学させていただき、お話を聞くに当たって、日本とモンゴルの医療機関の格差に衝撃を受けました。また、日本のような設備が整っていない中でも、情熱を持って学んでいる学生達を見て、刺激を受けました。モンゴルでの経験を経て、今まで先進国の進んだ医療に憧れを抱いていたのが、このような発展途上国の医療の進歩に携わるということにも興味を持つようになりました。このような経験をさせていただき、このプログラムをサポートくださった皆様に心より感謝しています。また、是非もっと多くの人達にこのプログラムに参加して欲しいです。

